

SHOW HEY シネマール

★★★

シンプルな情熱

2020年/フランス・ベルギー合作映画
配給：セテラ・インターナショナル/99分

2021 (令和3) 年 7月 17日 鑑賞

シネ・リーブル梅田

Data

監督：ダニエル・アービッド
原作：アニー・エルノー『シンプルな情熱』（ハヤカワ文庫刊）
出演：レティシア・ドツシュ/セルゲイ・ポルーニン/ルーニエ・モー・シオン/キャロリーヌ・デュセイ/グレゴワール・コラン/スリマヌ・ダジ

■ショートコメント■

◆本作は、フランス現代文学の頂点アニー・エルノーが、自身の愛と性の実体験を赤裸々に綴り衝撃を呼んだベストセラー小説が原作とのこと。しかし、『エマニエル夫人』（74年）を大ヒットさせたフランスの官能文学も、今やこのレベルに急降下しているの？

本作は、レバノン出身のダニエル・アービッド監督が、女性ならではの視点で、原作のスピリットを繊細かつ大胆に表現したそうだが、チラシに書かれている「昨年の九月以降、私は、ある男性を待つこと以外、何ひとつしなくなっ—」や「彼は、私と世界を結びつけてくれた—」が本作のヒロイン、エレヌ（レティシア・ドツシュ）の実感らしい。しかし、スクリーン上で描かれるのは、子供を放り出し、自宅に恋人のアレクサンドル（セルゲイ・ポルーニン）を招き入れての情事の繰り返し。ホントに、そんな生活でいいの？

もっとも、エレヌが女の友人に赤裸々に語る場所では、今まで通り、大学での授業をこなし、読書も続け、友達と映画館へも出かけたが、心はすべて彼に占められていた、らしい。なるほど、なるほど・・・。

◆本作は、エレヌがお相手のロシア大使館に勤める男・アレクサンドルとどんな機会に出会い、どんなプロセスを経て肉体関係を持つに至ったのかを解説してくれないが、“バレエ界の反逆者にして孤高の天才ダンサー、セルゲイ・ポルーニン”がアレクサンドル役を演じている。したがって、その美貌と鍛え抜かれた肉体を見ていると、エレヌはそれだけでその魅力に魅かれたであろうことはよくわかる。

本作には、離婚した元夫（グレゴワール・コラン）があまりにもひどい状態に陥っているエレヌを訪れ、苦言を呈するシークエンスが登場する。それを聞いていると、言い分の正当性は元夫の言うとおりで、男性としての魅力を比較すれば、そりゃ断然アレクサンドルの方が上だ。

もっとも、去る6月21日に観た『愛のコリーダ 修復版』（76年）では、定と吉蔵が情事にのめりこんでいくサマと破壊に向かっていく2人の必然性がよく理解できたが、そ

の点、本作はイマイチ。よく、これで映倫をパスしたなど思えるシーンを含めて、アレクサンドルの肉体的魅力には納得だが、同時にその存在感や生活感の無さも顕著だから、物語の空虚性もクッキリと！

◆前半はお互いに「あんたが最高！」と言い合っていた2人だが、さすがに中盤には痴話喧嘩(?)じみた喧嘩も。そして、エレヌはある日を境にアレクサンドルと連絡が取れなくなってしまったから、アレレ。これは、アレクサンドルがエレヌに飽きてしまったため？もしそうだとすると、大人の男と女なら、もう少しきれいな別れ方があるのでは？そう思っていると、本作ラストでは「それから8ヶ月後」になるので、それに注目！

パリの大学で文学を教えているエレヌには授業もあるし、離婚に際して立派な家ももらったとしても、1人息子はエレヌが育てているのだから、子育てはそれなりに大変。ところが、もはや“切れた”と思っていたアレクサンドルから8か月ぶりに電話があり、「家に行く」と言われると・・・？

そこでのエレヌの対応は、子供に対して、「友人の家に泊まってくれ」とお願い(要求)する始末だから、これではいくらなんでも母親失格。親権を父親に移すべきでは・・・？

◆かつて、1970年代のフランスを席卷したのが『エマニエル夫人』シリーズだったが、あの時代は“女性の自立”が先進国共通の大テーマだった。『エマニエル夫人』ブームは、女性の政治的・経済的自立を目指したアメリカの「ウーマン・リブ」運動とは異質の、とりわけ、女性の性の自立を目指す映画として大ヒットした(?)が、本作に見る女性の自立とは一体ナニ？

『愛のコリーダ 修復版』は絶望的な結末を迎えたが、本作のスクリーン上で描かれる、甘く切ない愛と官能の物語は、最後に何をもたらすの？私にはそれはよくわからなかったが、それが「恋という名の情熱とは、自分自身を再発見し、人生をさらに自由に羽ばたくためのギフトだと教えてくれる」だと知ってビックリ！ホントにそんなことってあるの？しかし、ラストに見るエレヌの顔は生き生きしていたから、なるほど、なるほど・・・。もっとも、私にはそんな女心はいマイチ理解不能だが・・・。

2021(令和3)年7月21日記